【松山城南高校野球部監督】

阿保暢彦

「監督はサポート役。自分たちで考え、動けると強い。それが理想」

修徳高（東京）を率いて2013年夏の甲子園に出場し、国体優勝も経験した。新たなチャレンジの場を求め、昨年の春、松山城南高の監督に就任した阿保暢彦は、試行錯誤を重ねながら「聖地」再訪をめざしている。

文・写真　和泉太

Highschool coach's file in Ehime
BASEBALL

人間的成長なくして、技術向上なし――。阿保暢彦は、そう信念を持ち、選手と接する。目を向けるのは、あいさつや返事、練習に取り組む姿勢。根底にあるのは、上達には素直さと謙虚さが欠かせないという考え方だ。「1＋1」を5にも10にもするのは人間的な成長。それが伴えば「技術は勝手に付いてくる」と力を込める。

駒澤大出身。最も薫陶を受けた指導者に、迷わず太田誠監督（現・同大終身名誉監督）を挙げる。横浜DeNAベイスターズの中畑清前監督や広島カープの野村謙二郎元監督らを育てた大学球界の名将は「練習も指導もすごく厳しいが、すごく面倒見のいい方」と心酔する。今でも会ったときには思わず「気をつけ」の姿勢になるほど緊張するが、指導者の道を歩む教え子を常に気に掛けてくれ、参考になる本を薦めてくれるという。

城南の監督に就任直後の昨年4月から、選手と保護者向けに毎月発行している野球部通信のタイトルは「姿即心（すがたすなわちこころ）」。意味は字のごとく「その人の姿がその人の心を表す」。駒大野球部に伝わる太田氏の言葉だ。壁にぶつかったときの拠りどころとなっている。

LINEでやりとり

原点はぶれることなく胸に刻む一方で、「ベター」を積極的に模索する。今年に入り、部員との間で始めたのは無料通信アプリのLINE（ライン）。まずは野球部のグループLINEに入れてもらい、今は個人個人ともやりとりする。

城南に来て、選手とぶつかり合うこともあり「コミュニケーションをあらためて大事にしている。本来は日々の練習で感じたことなどを記す野球ノートがふさわしいのだろうが、今の世代はこちらの方がとっつきやすい」。野球の技術だけでなく、進路など面と向かって尋ねづらいことも少しずつ話題に上るようになってきているという。

軟式野球も含め、指導歴は24年。最も手応えを感じたのは、やはり甲子園出場を果たし、国体優勝を飾った2013年だと振り返る。他人に厳しく、自分にはもっと厳しい主将と、彼を支える三塁ベースコーチの2人を中心に、自主性を備えたチームだった。

「監督はサポート役とあらためて思った。自分たちで考え、動けると強い。それが理想」

飛び込んだ新天地、愛媛で理想の再現、いや更新をめざす。

Profile
阿保暢彦（あぼ・のぶひこ）
1973年6月1日生まれ、埼玉県越谷市出身。修徳高（東京）時代は遊撃手としてプレー。駒澤大では指名打者などで試合出場。96年から修徳高の軟式や硬式野球部の監督を歴任。2013年夏の甲子園に出場し1勝を挙げ、その年の国体では優勝を果たす。